

母性意識形成要因の日本とオーストラリアとの比較

湯舟 貞子、瀧井ヒロミ

母親とは妊娠、出産、育児の経験を持つ、或いは持とうとする女性の子どもの関係から生まれてくる特性であると考えられる。また、生物学的、心理学的、文化・社会的な存在として女性性が成熟していくと共に、子どもに対する感情・愛・意識・行動が発達する。そしてこの発達する母性は女性が生涯において経験する多くのことや、これらのことから学習し、身に付けていく価値観によって、またその時々、社会構造によって大きく影響を受けるのである。

今回の調査で日本とAuで、現在子育て中の同年代の女性を対象に母性意識に関する調査をすることにより、子どもに対しどのような感情を持っているのか、さらに問題が発生した時の対処方法について考察を加えてみると、子供との接触時間が6時間以上と答えたものがAuが60%、日本40%とAuの方が長い。また、育児をすることが楽しいと答えた者も日本35.0%であったのに対してAu59.5%であった。このような人たちに、家庭生活の満足度を聞くと「満足している」と答えた者、日本16.7%であったのに対しAuは59.5%と非常に高い値を示していた。子を持つ親が日曜日ごとに教会に足を運ぶことによって、身近に相談できる相手に囲まれていること、また悩みがあったとき身近に相談できる祖父母など年長者がいる事などが一因であると考えられる。

また、ハンターや、ティールらの研究の中で、誰かしら支えを与える人々—祖父母・隣人・先生・友人など—がいて、人に頼る事ができる者は人の支えを知らなかった者よりも母親としての生き甲斐や充実感など母親としての満足感を得ることができる、と述べていることから云えることである。

次に、日本文化の中で培われてきた、「わが子のためなら自分を犠牲にする事ができる」や「男の子らしく・女の子らしく」また、「子どもは家を継ぐものだ」「遺産を残す」などがAuの方に高い値をしめしていたことに関しては、いつの時代から日本人に、これらの意識が稀薄になってきたのかについては、今後日本の歴史をひも解きながらその解明を進めていきたいと考えている。